



Handwritten text on the right edge of the page, partially obscured by damage.



春田にやうな器乃か作ハ馬よりおこハき物あり人
 力ありきよへうとくもさうへー。器ハたひもま
 くとて。しよたおさるん。次よんり
 くられきよ。あやうきもやあつとみて。かおかち事
 をもへうとく 神機乃字也
逸定をやうへうとくす也
以後も前後と同く取替れ
上よつてそのゆゆと也
 中や。是は秘器なりやと申
 月うつたるの人たとい不埒あり おん

不吉 無器目也
 井家 其家よやうとる金り

天保六年

とろりめして 聖内にても
曾十曾純ロビシ一して篤実トクジツあれ
ハつるよ一貫の信とえさうり
松せとも真れ下悪ハ悪よ
へて善よ入すよ一袋付う
悪も畢竟ハ下愚至極也
たぐみよ一と 蘇秦張儀う
揣摩ニヒの法とくみあうころ
よあわすすれたれころい
つりりかひまきまうゆん
よ早くて失敬サバシよかまり

といへとも。堪徳の徳家の人
よあふぬ時。あふれまよる事
ハだゆとあくつーとえうら
くーくきぬとひと入り自
由あるとのむとーからぬや蘇ゲイ
張チヤウ張チヤウのともよあふぬおやうと

乃振舞かつらひと。とろりふくつーとーありま。
得トクの中やたぐとあしてかーまよあつハ失オシれ中や

戒ケイ若ニヤクよと法師ホフシよありてガク學ガク句ク一と因果インガの理リととあり

世セららるるはさくらまき
説セツ経キョウよして世セよとろたつきせ

せよとひいれハ。よ人のまよ。説セツ経キョウ師シよあんだめよ。

先マちよチあアあアひヒくら。輿ウ車クルマとトぬヌめメのノ導ドウ師シよ徳トク

せうせん時。馬ウマあアひヒくクよヨとトせセらラんンよヨりリあり

おておらあんま。さうらうくーとひいくら。次ツギよヨ伝デン

事コトのノ後ノチ酒サケあアとトすスむムぶブあアとトありんンよヨ法師ホフシのノ下カ

よヨ法ホフのノ六ロク檀タン那ナすスとトあアひヒくクーとトとトまマあア

たうのぬ事もおぼしき。きよく抱き定うし。不
定と云はぬもの。後よき事なりし。

妻と云はぬ。たのころ持おき抱あはし。いも抱

こめくあはせし。心めくきれ。縫う。簞よ成ぬ

と。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。

い。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。

あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。

あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。

あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。

あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。

あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。

あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。

あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。

あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。

あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。

あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。あはせし。

ちよめていふ。いふ時よもせむねおあれい。も
おうちとけぬいまたりや。そきとくまへくむ
つころいふか。多。もた男れ回く出てゆふ
。女もあつくおやとおすぬりつ。積たぬてく
あをつくろひ出ろくろり。一。事終

亦仏も 前後のあまり
あ
亦仏もも人のまゝでねお

まりのころり

くろく人 愚闇の人也
。莊子小知不及大知。又曰
くろく人乃人となりて。そ智

大知闇、小知闇、海間、
間と言、智量大小不同也
賈生、眼鳥賦、小知自私を賤
彼貴我

万乃道也、百工也

尚書五字之歌、予視天下愚

夫愚婦、能勝予

文字乃法、昨暗澄の禪師

止觀第五、暗證禪師誦文、法

師とあるも、より文字法師

ハ叔相をあらめて坐禪と

まゝぬ也、暗證、後所ハ坐禪

工夫と専らして叔相よく

らきまう

さすくれころり。こ思ん事。大まうあやまりまう人

とちまうと思ん。さうにあこ
おへつひつゝあま人の基う
つ事つりい。ささくらみまうハ
かこた人のび流けいまよとらうまう
とんて。どのゆう智よ及つとと
ゆめて。よろつれるのたらく我
るど人の志うさりとんて。まの

中庸曰治國其禁諸堂乎

欽定四庫全書

久我内大臣 通基也也

或人久我繩子と云はつるに

小神又大はきこる人なつるに

此處を國の中此よりぞと云ふ。念此はあはひき

つこひつるこゝろがふ。将兵の男二三人出きり

あまれり。まきりといへんと是といひおきり。

之我に大臣教よてうかりきりよのつひよかり

きり。兩八神妙よやんことあきいんよかりきり

東大寺乃神興と内裏へぬる時

東寺乃若多

此殿 上元以此久我内大臣

河海又唱道前所警蹕

二字のあひあつと云

左内門相國 定安公也久我

の慶流

敬蹕 前漢列傳十七梁孝王

得賜天子旌旗從千乘五騎

出擁警入言蹕 注師古曰警

者戒肅也蹕止行人也言出

入者互文耳出亦有蹕 漢

儀注皇帝輦動左右侍帷帳

東大寺の神興東寺若多

よるし海陸の時源氏れり

らきり。よび教大おまて

をいれり。右内門相國

て敬蹕いり。侍るへん

さきとれは。注師古曰

はの家りきり。事よひと

こゝへ結り。さき後

者フルル兼フルル整フルル出フルル殿フルル則フルル傳フルル蹕フルル止フルル入フルル道フルル也フルル 韻會蹕本作蹕

其身のつらまひ 大将のつらまひ
多フルルくフルル返フルルりフルルまフルルまフルルをフルルせフルルらフルルるフルル也フルル

小山抄 公任の作也一也
小野抄とあり小波の抄と

西宮乃伝 西宮記ハ西宮左大臣
長子明子の作あり

きつらびお國小山抄と入て西宮
の流とさうとせられりきれ脊
度れ悪鬼悪神とあそつて故
神社とて神よききこをよへま
とつりありとて傳られき

定額 續日本紀文武天皇本

寶元年今月皇親年滿者不
論官不皆入賜祿之額

弘仁二八日大政官府林勘京
職畿内諸國私作御監事右表勅定額諸寺其數有限私管作先既立嗣此來所

言竟繼曾不糾察如經年代無地不寺

十八史畧第七元以罪律

定寺乃僧徒とともあつて定額の
女孺といふ事。延喜式に乃入とあり

定天下賦稅上田每畝稅三升中田二升半下田二升水田一畝五升苗稅二十
分之一五斗出絲一疋以給諸王功臣湯沐之賜塩每銀一兩四十升米為定額
み多ぬのささまりとて定額といふ也唐志よ出たり 女孺 禁秘抄
云近代ノ著衣尺小袖唐衣也以左道交御調度觸手上下格午奉仕是藏人等
如在不當故也御所中掃除指油役女孺野知也 延喜式 五十卷あり延
長年中古大茂忠平勅とてきく博士ともとあつて是を撰と

十入て救ささまりとて人の通号よと抄

揚名分 源氏三ヶの大幸也
揚名目 受領は法國乃守分
標目乃これとあり 職原
み入とあり

揚名分はささまりとす。揚名目といふ
そのもあり政事要畧よあり

政事要畧 百三十卷あり 惟宗夕亮撰記公務交替糾彈雜事至要臨時雜事等

行宣法平 坂本此のよあり
といふよは居住せし人

横川乃行宣法平より作しと

律呂 或人のいづく目ハもえて
ヤリウウあるも也律ハも

てこハきまも也唐人の音ハハ和りてきてヨケクノ一ハ中乃人此云律也
漢語ありくもきつくきこゆの律呂の音也といハリ呂律ハ陰陽也

和國とて單律の國とて。此れをあらとヤキ

河竹 六百番定家公名号

河竹乃あひくも風よ年業
二世北佛のぬをきくハ

涉澤 禁庭の溝也 唐于祐
得御講紅葉題詩
仁壽殿 拾芥云南殿北九間
四面

其竹ハ葉をうく。河亦ハ葉ハ
ろ。此溝よりきハ河亦。仁
壽殿のぬよりりて種られ
くハ其竹あり

西域記九云如來律也諸五十
多居士執鳥山廣説法摩訶

退凡下系乃卒都波外あり

臣國類婆沙羅主為國法故與發人徒自山麓至峯跨谷巖編石為階廣十餘
歩長五六里中路有二卒都波一謂下乘昂王至此徒行以進一謂退凡即箇凡人
不令其往其山度 下乘王乃車ありのりて我也そよある卒都波と下
乘ハ山下ありゆふかあり退凡山中ありぬあり

とて下系内ありハ退凡也

邪智月 貞治乃比藤沢山乘

十月と邪智月といひて邪事

門由阿ク万葉集の注と
て詞林采葉抄とみつくその

とてつへきなりハ忌りたる地也

弟六云一天下乃邪智月
をそと雲玉は邪智月と

れと文をえしは但尚月法社の

を邪月ともヤ也我社の法
邪事ありありのりくもふ

祭ありき故よけふあり。巳月

也その邪もこれくも邪くも此の対小童代はくまろくもまろ 陰舟波上
ようくも教をとくす後邪ハ被浦の邪をけやろよありまろくもまろ

大社へ奉りたりは社神坐の社ハ不社山と云ふなりたまた小社号佐大
 明社とヤ也是則傳差社神ありてまふす大社ハ祈春明社とヤり別
 當と入國曹とヤりたり大社ハ素盞鳥とヤりてありまは日本國佐社と天
 照太社と云ふ京座の社なる事なきを教あるべきはなとては社大社と傳祖社
 として事ありあつめたる事とては不審ありこれハ子細秘なる也
 一社流の社書と云ふ所の尸きり素盞鳥の社ありまふすハ十月也是
 故又十月を素盞鳥乃つと云ふなりたまふべきなりと勅しありまふすは
 社神坐雲へ奉りたまふは又出雲の社也月とヤとくころきき魚也
 して其家を生れて社道と云へき人ありと云ふれはもいふ説しては社法せと
 子時を中夜とすなりまふすころ十月を陽月と云ふころ幸ハ陽るきと
 たりと云ふ雅なる事あり
 十一月ハとめて一陽未復
 するゆへは十月ハ極陰の月也
 さにとも陽月といふ陽の果
 ては多ありまき道理也陽
 社のなるは月ともいふ事ありて

よろつの社を。を社文へあり
 ありの事ありて説あれは。ま
 説あり。さる事ありハ侍勢ありと

社を月と云ふこと勅簡する
 人あり

社乃行幸 拾芥云松尾
 元年十月北野寛弘元年十
 十四日 日吉 興久三年十
 月二十九日

勅勘 天子の御勅也
 菅室一名 山谷詩
 倒勅 蓮乃実
 のゆけいころ穴う矢と入系
 うつかり
 日本紀社代上天照太神背
 肩子箭之鞆与五百箭之鞆
 鞆を矢籠也との平胡録乃
 数あり 世中代さへりき時
 各社也 皇孫美子のみ也 大已貴と天下を怪として疾病と治する人

に祭月と云ふ事。まは例とあり。
 十月社社の行幸を例もあり
 一。但おほくハ不吉の例也
 勅勘乃西は鞆ころ作法今ま
 たえて志れる人あり。まは社
 大く世乃中代さへりき時ハ又系
 の天神よりきとくまは。鞍馬

時氣疫病の時也 又系の天神 鞍馬
 疾病と治する人

とくまへあつて中紀第一
よりえり今よのころま
たかよみ像の天祚子人
まのりて木餅あしとけ
てあやことのそき出行の
首途といふいととあま
も遺法あるへ

鞍子ゆきの明林
看督長 職原云檢非違使
使廳本所乃當使補看督長
鞆尉廳也
亦十六人此為遺諸國也

犯人 罪を犯せり人也
和名云唐令云管音
和名之 大頭二分小頭一分
又云杖音仗和皆音
分半 名都惠

去節目長三尺五寸許
拷器 玉篇拷吾老切打也

大竹勸請乃起後 元亨釋書
釋良源始木津氏述功淺井
郡人也延喜十二年九月三
日生享十二上穀山師事理
山延長六年礼尊意登壇受
戒云云康保三年八月補天
台座至領山務者二十年天元四年為大僧正兼法務聽轡車永觀三年正月三
日唱弥陀而滅年七十四賜諡慈惠 於延喜正慈惠と云りり益号をせとも
山門をなとて云云大竹と云あり傳教弘法慈覺智佐の承る大竹あり
法曹 明法家といふ法曹とも法家とも也律令と云るはあつて法
一のあり法曹至要扱とい
へ家とあり 職原

よゆき代明林といふも鞆ゆき
まのりきり祚也看督長
負つるゆきをその家よりき
まぬれ人出りす。其事を
えそのら今乃世に封をつ
家とありより

犯人と云をもとよりつ明林
おもせゆひつらあり拷器此

扱もよする作法をいふこと
へあつる人ありと也

比穀山よ大竹勸請乃起後と云
るの慈惠傳正と云りめ新き
あり。起法文といふ事法曹の
はき。いふへの聖代とて起

靈則不笑人以為怪則怪不以為怪則不怪伊川尊人官麻多妖或報曰鬼較其母曰把槌与之或報曰鬼打扇其母曰作熟故耳後遂無妖只是主者不為之動便自無了細觀左氏所謂妖由人興一語說得極出明道石佛放光之事亦然

登罪乃官人 章兼とらす 韻會冠鳥光切跋曲脛也或作屈亦作偃荀子賤之如偃注廢疾之人 ちるハ辱罵のりやしくさき残也 あやーとそてあやーまさら 千金方黃帝雜忌咒曰見怪

不怪其性自藥

龜山殿

ちうくろる 舊の字也久

きんぎょ

ぴかどー 前段の突基公也

まふよとん虫

ちもまもとら大老乃國まれのいほくくおよれやとーまこめん 鬼跡ハハとー後や

俗は鬼跡は横道ありとふろしー 左傳神聰明正直而壹者也蛇のくまとま。とあり吉兆をよめすもあア後野洋也

まよふ別あり。是あまこいりくらのわくさるん。健弱の友人。たはく出は乃微まどさるん。きやうまーとて。まよふまにうくして。あーりきろくこまどかへらねまきり。あへて函事まうりせ。あとあんあやーとをみえあやー。後さう時。あやーみるるり

てやふあといつり

龜山殿そらせんとて地をひ

くれまろよ。大きまろくらまの救

とまろにありあつまりさう塚

まきり。ぴ西の跡ありといひて

しものりをやきれた。いーあつ

まきと勅回ありまろよ。あまろ

よりこれ地をよめさう地あり

拜會日偷本非礼所以不拜
異本云孔父奉有子子大者
六歲小者五歲晝自父眠床
頭盜酒飲之太見謂日何以
不拜答曰偷那得行礼

ふんみちりけりくの回をりへり
まてゆくを。是ハ福一なるや
あすす。いうまかくいといきれ

んがりものとも。そふそてもかろんきことりりまらき
ハ僻るせんとうまろりあられんいつくどつかりさ
とらひきる。ことりりいをれり。うをきり

喚子鳥 古今集三鳥の其一
也相傳多ハ難知之
招魂法 楚辭注曰招魂者宋
王之所作也古者人死則使

いふてきき。ま乃地ありと
らりりいて。いうるるるを

人以其上服升屋履危北面
而驅日畢某復遂以其衣三
招之乃下以覆尸下略之
人々これ詭ころ附まらひ
久む秘法也去云宗よひ也
招會以手日招以言日召
鶴 鶴ともくもり 和名云
唐韻云鶴音空漢語惟鳥也
海篇云鶴音夜鳥名

さころい志るせふものほ
あつ言書此中によふて
ききく時。招魂の法をを
れこあ次身あり。是を空
あり。万葉集乃長あり

喚子鳥のあつとさよ目のあつとせころり。鶴音も
いきりひありとて威勢あり
とて也秦の始皇の類あり

割乃事無。喚びへり

三略柔者徳也剛者賊也
又曰威多則身蹶

賤おろし阿房の鼎たがひ鑄玉

石金塊珠たがひ磔たがひも子羽たがひ一炬たがひ

驪山三月の紅地

戈ありとして 莊子曰孔子再

逐於魯窮於齊伐樹於宋困

於陳蔡不容身於天下

孔子も時たまありき 論語道

不行乘桴浮於海云云

徳ありとして 道德也

顔回不幸ありき 論語顔回

不幸短命而死

孟の竈たがひとも 史記の韓非傳

小衛弥子瑕たがひの車たがひはれ

是地の餘たがひとも多たがひありき

とろろある人、そそく物を
おむひへに。うろといふこと
あり。いきわひありとてたの
むへへへ。こりきおせんかろ
ぬ。賤おろしとておむひへへへ。
時のふに失ひやとて。戈あり
とておむひへへへ。孔子も時
ありき。酒ありとてこむむ

受妻てけたがひ二事たがひ大あり罪也

とて殊せたがひきぬ又楊たがひ也

國忠たがひうたがひぬも早たがひて鬼の

鬼ともせり

奴たがひころりとして 彭寵

梁冀たがひ 抑たがひ権 張たがひ之定たがひ

やめこれたがひしきすたがひまか

らす

人の志たがひも

九士たがひ卒たがひ心たがひをたがひ棄たがひて敵たがひとも

せみたがひたたがひとたがひるたがひ古たがひ今たがひ甚たがひ

多たがひ一たがひ盟たがひ友たがひのたがひ方たがひも又たがひ出たがひ

約たがひもたがひあたがひひたがひへたがひへたがひ

張耳たがひ陳餘たがひ刎たがひ頸たがひの交たがひをたがひひたがひ

ひたがひりたがひもたがひ怨たがひ殺たがひとたがひりたがひ

張耳たがひ韓信たがひとたがひ同たがひくたがひ陳餘たがひをたがひ殺たがひ

へへへ。顔回も不幸ありけ。
孟の竈たがひをたがひおむひへへへ。
殊とろろ事すもや也。故
志ころりとしておむひへへへ。
そむきとろろありとあり。人の志
もおむひへへへ。必たがひ受たがひす。約
はもおむひへへへ。信あり事
すも。所たがひももへへへもおむひたがひ

つるやうふいふまゝに人々を御まつぬらんさうぬ
 きぢやあつとくいふまゝにわらわのあつとありし
 ろは。志そくしりてくぬくまことめ。頼子。たしあの
 棚たなよふと恙こころしよみそれがつかつまゝと見え出た。こ積
 う求もとめえてさうぬとやしうは。事こところりあんと
 て心こころのく救すえん献けんよ及およひて。奥おくよらうとせゆりき。世
 よかかくうゆりうとゆりされき
鶴岳 東鑑第一云後公泉院 時伊豫守源朝臣頼隆奉勅
 最明寺入道 鶴ヶ恩乃社系

伐安倍貞任時有丹祈之旨
 康平六年八月澄勸請石清
水建瑞瑞離於當相模國由此
郷今号三保元年二月建
陸奥守義家加修後治兼四
 年十月頼朝点示林郷之北
 山搦宮脂被託之
 足利尤馬入道 東鑑四十四
 云建長六年十一月足利尤
 馬入道正義病勢已危急之
 間為訪之相州令向彼第給
 二十一日入道正四位下行尤
馬頭源朝臣義氏 法名 義本 圖
云義氏者義康之孫義兼之
子母北条時政之女
 あつとまうを 譽應とくを
 己日中記して譽をみあへ

乃次なりつぎよ足利尤馬入道の許へ
 先使ついでとつらうて。左ひだりいさきた
 己おのれきつに。あつとまうきつれ
 ころりきつ極えん一献いっけんよらうありひ。
 二献にけんよらうひ。三献さんけんよらうい
 まてやまぬ。さう應さよらうま
 夫婦つまご陸弁りくべん信しん正せいあり。かた
 人ひとよて座ざせしれらう。さう年

とよめり俗よりてまよと
とむ

一献 礼記一献之礼賓主百
拜 曲礼君子之飲酒也一

爵而色灑如也二爵而言言
斯三爵而油油以退

隆辨僧正 鶴留別當也宗尊
將軍御木剌之時致祈禱加

持依為効驗為恩賞拜領羨
濃國岩瀧廻被狂僧正

晋魯慶餘神論曰親愛如兒
字曰孔方失之則貧弱得之

則富強無翼而飛無足而走
火のかんきんよんき

解嚴教之類開難教之口錢
多者處前錢少者居後云云

易乾卦曰水流濕火就燥雲
從竜風從虎孟平曰猶水之

就下也

真欲多矣 音樂好まると多
と云

折人等 是より上大福長共
の詞と空てまよより未兼好

論語注云抑又語詞

後漢の言伏波の事後奴と

と有賊饑鬼と云るり

一とふ強うは利の深地心り

あつひとやまされうまひ刃に

さう極うて多その深地三十

あうて女あとのふお被うて

せさきて後うつはきれうり

時ううう人のちうくまて得

しうがうり侍あり

或大福長あいのいづく人

ろつとさうとまてむいありよ

油とつうきやあしそい

きういほしとめるのこを人

油と流んと思うすんう

先を心つうひを流すまへし

心と云ハ化のこにあらぬ人

常任乃心ひは極してうりうも

と云と云と云と云と云と云と云

瘡疽を病との

貧富よくあり 貧者の賊

乃其心也。以よカキ此則とくお

主と

と求むともいふ富人ハ奴

ぬへくは。人の世はあり自化よ

キヤンハハヨウ

主と

室多きれとこれ一とて

つきて不取無量あり。欲よ得

ある

主と

又貧者も是と志せし

て志ととせんと思ひ。百万の積

あり

ありといふとも。志つらも任とくは。不取ハやむ

時あり。賊ハつらるる事あり。なきりある奴とりらる。

くさりたれば。志つらも任とくは。不取ハやむ

あぐれん

すむありハ。我とわら海と入も悪念きこひり

と。かへつてしとねをいし。女おのまへく

は。次は穢と奴のこくして。つひ用ち物と

と。みく貧者とまぬらるるは。志のこく

非れしとくねされたうとて。志つらも任とくは

しとまくれ。次は志のこくして。つひ用ち物と

ひあつたうれ。次は志のこくして。つひ用ち物と

しとまくれ。次は志のこくして。つひ用ち物と

きこらるる。人のくらきとよき。くらりのこくして

ふちこりよりよくあるへし。後つらうしつちやう
時を。窳欲^{えんじん}を多^まくせし。其^{その}時^{とき}を^をかきし。

所教とあつてせしむ。さうさうさうさうさうさうさう

たのしき。柝人^{さくじん}を^をせんとせしめよ

賊と^とわかれ。後を^をせしむ。なりひと^とかまふ

ふらぬ也。所教^{しよきやう}あつてせしむ。後^{のち}あつての^の期^き

窳^く竟^{けい}ハ^ハ即^{すなは}ち^ち一^{いつ}

天台家^{てんたいけ}ハ^ハ即^{すなは}ち^ちあり^{あり} 理^り即^{すなは}ち^ち

名^な字^じ即^{すなは}ち^ち觀^{くわん}行^{ぎやう}即^{すなは}ち^ち相^{さう}似^し即^{すなは}ち^ち分^{ぶん}身^{しん}

即^{すなは}ち^ち窳^く竟^{けい}即^{すなは}ち^ち地^ち理^り即^{すなは}ち^ちハ^ハ仏^{ぶつ}法^{ぽう}

さうんバ^{まきくひん}金^{かね}負^お老^{らう}者^{しや}を^をねがふ。
何^{なに}と^とう^うの^のい^いと^とせん^{せん}ば^ばと^と記^き

乃^の名字^{なみざう}とも^{とも}あり^{あり}ぬ^ぬ薄^{はく}地^ち底^{てい}

下^{した}の^の丸^{まる}夫^ふ乃^の至^し玄^{げん}巖^{がん}まで^{まで}皆^{みな}

仏^{ぶつ}性^{じやう}を^を具^ぐする^{する}を^を云^いふ^ふなり^{なり}各^{かく}

字^じ即^{すなは}ち^ちハ^ハ仏^{ぶつ}法^{ぽう}と^とい^いふ^ふを^をあり

た^たり^りあり^{あり}觀^{くわん}行^{ぎやう}即^{すなは}ち^ち半^{はん}行^{ぎやう}修^{しゆ}

行^{ぎやう}す^すり^り之^の相^{さう}似^し即^{すなは}ち^ちハ^ハ仏^{ぶつ}菩^ぼ薩^{さつ}の

行^{ぎやう}は^は近^{ちか}く^く似^に似^に也^{なり}也^{なり}也^{なり}也^{なり}也^{なり}

ハ^ハ菩^ぼ薩^{さつ}の^の位^いまで^{まで}衆^{しゆ}生^{じやう}淨^{じやう}度^だ

のため^{ため}ハ^ハ變^{へん}現^{げん}す^すり^り也^{なり}也^{なり}也^{なり}也^{なり}也^{なり}

即^{すなは}ち^ちハ^ハ妙^{めう}覺^{かく}の^の位^い如^に來^ら地^ち也^{なり}也^{なり}

也^{なり}也^{なり}也^{なり}也^{なり}也^{なり}也^{なり}也^{なり}也^{なり}也^{なり}也^{なり}

類^{るい}ハ^ハお^おま^まり^りて^て悉^{しつ}皆^{みな}佛^{ぶつ}性^{じやう}あり

と^と窳^く竟^{けい}ハ^ハ理^り即^{すなは}ち^ち何^{なに}と^とい^いふ

悟^ごハ^ハ同^{どう}未^み悟^ごと^と云^いふ^ふを^をい^いふ^ふ也^{なり}

又^{また}中^{ちゆう}有^{ゆう}肉^{にく}成^{じやう}仏^{ぶつ}作^{さく}什^{じつ}摩^ま爲^ゐ迷^み

倒^{たう}之^の衆^{しゆ}生^{じやう}とも^{とも}云^いふ^ふ也^{なり}

てハ^ハ人^{にん}百^{ひやく}の^の望^{ぼう}を^をた^たち^ちて

貪^{こん}を^をう^うま^まふ^ふへ^へう^うと^とい^いふ^ふ也^{なり}

と^とら^ら。欲^{よく}を^をあ^あつ^つて^てた^たの^のい^いと

せん^{せん}ふ^ふる^るハ^ハ志^しう^う駭^{がい}あ^あつ^つん

ふ^ふハ^ハ癡^ち癡^ちを^をや^やむ^む者^{しや}あ^あつ^つよ

あ^あつ^つて^てその^{その}い^いと^とせん^{せん}ふ^ふり

ハ^ハや^やま^まさ^さら^らに^にい^いふ^ふと^とい^いふ^ふ也^{なり}

い^いと^とり^りて^てい^いふ^ふハ^ハ寫^{しやう}し^しく^くと^とい^いふ^ふ也^{なり}

失道卷四

并八

大欲ハ多欲ニ似ラリ。聖ノ總
録百九十九曰欲生則三戸
生欲滅則三戸滅故至人曰欲者不欲不欲者欲云云有憐貧の人く皆欲深
して一欲半獲を折りめとらば生のためはつとこの金銀を費すいりむと
多き人極樂は生れて金玉の堂に居て百味は飲食をうくる木柴は海にと
の欲心ありゆへは今生まで布施をさくす多欲は修り

大欲ハ多欲ニ似たり

堀川政 久我一内基真太政
大臣堀川其後太納言父
也
かきのみま 仁和寺といへ
一洗云仁和寺は今仁和
和寺ありゆへは仁和寺あり
仁和寺の御位とてゆへりや
今も仁和寺とて号は龍安寺

狐多し人よりひつくるもの也。
堀川教もて金人うねる家
是を狐りくる。仁和寺は
し。よろず寺乃あまるとも

あり溪添へ移し龍安寺の
西のくこふあり聖と牛
寺はる堀といひけり此
事也

下法師よ狐之飛へくつて
くひつきまされん。刀をぬき

て是とせやくあり。二のきとつて
とひハ一きころり一ぬ二ハ一きぬ。法師ハあり
あくりきあう。もゆへありきり

龍秋 豊原氏集人の筆とて
家也此下より豊筑後統秋
く是也也豊原氏と略して
て
龍秋ハむおとててきやん
し。あまのたあト。えはむあり

短魚 早が此句

半道

三二

荒塚 過言の甚也

横笛 幸代笛の事也

十二律 數多律の事次人

あつたハ説えうこくじん又

安人者めけり略之

金相在

友三よ

二十九

ていんく 鑿の事なり。きりあ

く。意疎の事

く。意疎の事されとも。横笛

乃みれ穴ハ柳よりきりあ

作りし。むろくふ是ハ。ほは。そ故也。干れ穴也

平個ハ穴也下平個也。平言ハ勝絶調と云ふ

てり。上れ穴双調次ハ危絶調と云ふ

穴黄鐘調あり。そ次ハ平調と云ふ

中乃穴盤渉調。中と云ふハあるハ平調

仙調あり。かやうふるこり皆一律をぬすめ

り。その穴れと上のるは調子をきり

去りもるごとく。そりるをきり。きり

不快あり。されそあ穴を少く時ハ必のく。れを

あへぬ時ハ地ハあはれ。吹らり人々

料管のつこり。被り。其あり。先

をそると云ふ。けりありと

ゆりき。地はよ。そ。後りや

景茂 大猷氏ハ此の節

不知也

子曰後生可畏乎知来者之

論語子罕篇

朱子

三

乃時伶倫といふ梁人、ツル
よりりて板世は伶人と云
あり

とくせ

六時堂

若鐘調のもろなる

八月十五夜のあま 源順

か、面、照、月、を、こ、か、さ、れ、ハ
と、お、う、秋、れ、り、ち、り、ハ、ま、り

涅槃會 二月十五日也

聖霊多 太子の忌に二月廿
二日也

二日也

いつきのちまをともこのへ
尚書云八音古譜無相奪倫

録

と、の、お、り、り、は、く、ふ、り、か、あり

を、す、れ、ら、り、は、く、ふ、り、あ、り

此時の園の月もつらりとをく

と、い、い、そ、ゆ、り、六、時、堂、乃、あ、れ

待、あり、そ、お、ろ、あ、つ、後、洞、の、を

あ、り、あり、き、き、あ、り、は、く、ふ、り

あ、り、は、く、ふ、り、あ、り、あ、り、あ、り

涅槃會よりあり。聖霊多をま

乃申書を指書といふ秘苑の

よりあり。げ一個子をりらて

いつきのあまをともこのへつら

やと申さ。元種のおまはあつ

循るるへ。是吾常の個子

祇園精舎今れまを院れあ

也西園寺のかひあつ後洞あ

いらるへ。あまをともこのへ

女常の個子 平家物語に
祇園精舎乃種は、法苑を
このへつらり

祇園精舎の女常院
大蔵一覽第二云佛大檀越
須達多長者建之云

祇園太子の園を須達り
めえり建之故祇園といふ

西園寺 拾芥云衣笠聖良太
政大臣公經公家

録

二二

浄金剛院 つかさ山の南ニシヤ六ツ祭

の東は向江あり

拾芥云本名天安寺待賢門

院沙建立也浄の字を法と

多すかあり法金剛院を以

縁の推野あり

建治弘女 皆後宇多院の年

号

ゆつりの白髪衣れまゝに

赦免 東鑑二十三三年保六年

六月將軍家安朝任大將為

兼賀兼兼置隨共江判官能

以布衣冠草緒緒尾靴靴太刀

即等三人雜色四人調度懸

録

ふられむねをとりまはさり

きつとを國より召出らむ

なり。浄金剛院の持れむ文

コト...

建治弘女の法衣の赦免

はつき抱ふ。あやうまう綱此

布はみ端まてるとはくりや

毛髪まはさうしとくく

一人赦免四人

くもの折くまゝつ水干よつ

きてあれ心

くも乃折にあれさうらうま

かゝらうくふ人ハハハ

道志とも の 職原下 換非遠

吏の、一は道志、明法道輩

六位、任衛門志即蒙使算

旨、九志者奉行使感諸令

事之故以當道為其撰此号

道志也明法道の輩れ使廳

の志とまりふ衛門た弟口

代志とならうと道志とよま

つきその 祭礼の附りて

のつき抱へ上は赦免れつき

そのとあつむさまり

もの折くまゝつ水干よつき

て。あれ心まといひて。さう

とつひよん及ひ侍りまとも

真ありてまゝう心ちまてこ

う侍りてむたらう道志との

今日もくつと侍ら也。びこる

つきその年を送て。さうと

乃折にありて。あれたりも

録

三十三

を祖也

通憲入道 少卿言入道信西

也法乃通す人也

成徳師 東鑑六文治二平三

月一日預州安静及母成徳

師自京來于鎌倉下略之

向うまきさ さやまきさ

仏祿の中縁 仏祿の白本縁

起也

白拍子の根元 太平盛衰記

十七云世よ白拍子といふ

ものわり漢家よ、唐氏楊

貴妃王昭ふあといひハ

皆白拍子也然れどもハ多

羽院成亨は唐の千歳若前

とて二人の遊女舞ともめ

源師といひきさる女よと人

ふんえ

てまひせたり。さうき氷干よ

向うまたとさくせ。鳥帽子

さひき入るりきれん。男舞

とさういひきさる。源師のむま

めさういひきさる。げん

とつきり。白拍子志根

え也。仏祿の中縁とさう

タリ下略之

泳の支行 河内守大監地泳

氏地仲よ河内かといまい

人の他也

龜菊 東鑑二十五平三

五月武家背天氣之魁依舞

を龜菊といふ也

を龜菊といふ也

伝法前司の長

藝古の藝 藝古の字尚書

典よ出るり又後漢書拒

曰今日所蒙藝古之力也

ハ学問の力也といふ也

樂府 古樂府あり新樂府あり

文選よ樂府の詩歌をい

源の支行 河内守大監地泳

氏地仲よ河内かといまい

人の他也

龜菊 東鑑二十五平三

五月武家背天氣之魁依舞

を龜菊といふ也

を龜菊といふ也

伝法前司の長

藝古の藝 藝古の字尚書

典よ出るり又後漢書拒

曰今日所蒙藝古之力也

ハ学問の力也といふ也

樂府 古樂府あり新樂府あり

文選よ樂府の詩歌をい

失

三

せり元稹集白居易集
樂府乃欲甚多一長恨方傳
し樂府伎女とあり又樂
府雜録といふ事あり

七德神 貞觀二年正月更
破陳樂曰七德舞七德者蓋
取禁暴戢其保大定功安民
和法曹賦之義也
一藝之進學解名一藝者

て不使よせさせたまひきれん。げ法法入るを授
持志あつり。げ新長入る平家物統とつくりて
生仏といひきり。盲目ふとへてかたき勢きり。

くろきれん。又法冠と異名

とつこよきつと。ぶうこころは

て。學回とす。道世とす

きりと。意法和尚一藝あり

のぞん。下部まてもめ

さて山門の事を 意法いめ
とれらゆ人よゆりく
あつる也

九郎判官 義経也
蒲冠者 從五位下三守範
頼共速判蒲生御前生之
同蒲冠者領義経也

さて山門の事をとらゆじ
くろきり。九郎判官乃るハ
くりくちりて書のせた
る。蒲冠者のさふくちり

さりきり。あやぶやくのさかをとる。あしせり。
武士のさうまは。生仏東國乃老まて。成
士ろさひききて。くせきり。彼生仏うまれつき
乃しと。今れ法法呼ハまあひいりあり

六時礼讃 晋の惠遠法師
社をひすひて蓮花漏をき
さみ六時を礼せし六時念
仏の権典とす唐の善導が
付礼讃偈とてくひあつて
日夜の勤行とす安樂が作
ありとて八夏流るるや
と序出家の人ヤキ

安樂 法法れ来り也住き安
の別時念仏とて六時
礼讃と唱へ強て其へ賊群
集せしよと云々心して出家せしは後多羽院
罪よとてく小宮へ秀強よ作て六條河原とて安樂を軌法名如願
太秦 廣隆寺也秦氏の人來てふ一初よと秦寺と云也 善觀房
法華頌 兩卷上下あり是も善導作也ゆりてきりて多善觀を不為敬

六時礼讃ハ法華上人の身子
安樂といひきる偈種多とあ
つめてはくつとつとあよ
きり。も後を秦善觀と
云偈。しんうせと定てあ
ゆよあせり。一念礼念仏乃云

初也。後法華院乃代りまされ。法より
償をばあし。長親あしめ。る也

千中の釈迦念仏
文永 龜山院年号
女

千中乃釈迦念仏ハ文永礼此如
痛上人始られきり

妙觀 元亨釈書云勝尾寺講
堂觀音像宝龜十一年七月
十八日比立妙觀刻之千臂十目并羅端嚴又加四天主像九五尊三十日而成
八月十八日妙觀合掌而化觀音之灵應也 仲生撰初勝尾寺慕疎疏よも妙
觀像のるをきり

のき。細工ハかみあきこ刀をつつ小と
の妙観のるをきり
又際内裏よりのき地あり

法華院
三十八

藤大流云

未練の銀練せぬと未練と

云々までハ功のつぬぬ

藤大流を敢くしれ作ハ

教上人とも思戸なりて基流

くらきりよ。みごとをうききて見ろ地あり。たうと

見むきこれハ狐人乃やうよつらぬてさうれをき

ころど。あれきつひのよとよまされて。まよひのけ

よきり。未練のきつひのよを換しきりよと

園別當入道 基氏天福二

年十一月十七日上辞状出

家法名因空

らうるき、無双也

空乃別當入るハ。はうるのき

空一志あり。あつ人れをも

庖丁 日本庖丁者のくろく

で條家の鹿流山儀中納言

也 莊子養生主篇云庖丁牛

を解するを洋よ多ク丁氏よ

く庖厨のするを多てヤキ煮す

ふゆハ、庖丁と云ハ

たハ、ハ 普也

百日の鯉 百日のち毎日つ

めて鯉と云んや

はらてヤ、きん 毛根ヤ

くけきん、り

ふ、い、き、鯉をい、たり

きれハ皆人別當入るれ庖丁

と見んやと云へとも。たわい

くらいてんもい、と、あ

ひきつを別當入るきり人

て、びやと百日の鯉をきり作

ふと。今日うこ作りへきりあ、は、まけ、り

うきんとてき、れ、き、り、く、つ、き、く、

銀柳巻

三十一

く真ありて。人ともたげ入らずきつとある人
や山を改入る 西宮寺云陸
云也一系相國ととやま 山を改入る教よりなり

されたりまわらばもつらむの世はふらりまく
おがゆらありきらぬ入き人あつらひききんたと
いひこころはれよりあん何条百日の難ときりん
そとの流くふじたうしおがえすと人れくあり
流きつとあり。ぐくつらまひて真ありつとあり。
真あつてやとつらりいしあつたらつてはま

人乃卿まや食養ありていしおがきむらじらうは

たるも。後によされともだく其ともあつてとりお

人乃物まやとつらりいしおがきむらじらうは

論語堯曰篇猶之與之出
於力也謂之有言 孟子曰
可以乎可無以乎傷也 だあもつらりいしおがきむらじらうは

らんともひらばらつららあつらさうおい

しききこりきんとはらひたう勝負乃まきこ

りしもつきまいさうらむら

すうて人き無知無張さう入きまめあつら

乃子也。見たりとあり。かゝぬ。父のあつて
人とおろしとて。史書此文をむきしりし。さ
しとて。あつて。その者の前まで。はら
さしとて。あつて。おろしとて。あり

むと法師乃物くろ

平家物語あり

ちう 柱のままり 聚まの
あつらふとて。むと法師の
らうとて。むと法師の
すりままり 聚まの
の柱のままり 聚まの
ちうあり

又あり人乃許して。聖賢法
師此物語をきくんとて。むと
とめよせし。らうとて。むと
と。むと法師のままり

つめを切りし。つめと
あつて。あつて。生長とて
てあり。あつて。あつて。
ひつあつて。あつて。あつて。
つめを切りし。あつて

て。あつて。あつて。あつて。
申お。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。

あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。

乃乃親来りてうろりいみおきくこらあり
 まうはうろろろゆ。虚空よく抱ゆる。
 うろろろろろよ。念このわきまうよまあり
 うよも。なとらふもの。あまのあらんこころ
 りのあうまうは胸れうらぶ。ささく
 乃ともそへきうろろろろ

大社 社名強はな社と云
 出雲乃國此大社を日本紀
 八素盞鳥の子大日貴と
 祭とのひ社紙令は素盞

舟波よ出雲といふ所あり。大
 社とうつて。せてうくはく

鳥也といり又杵春月社と
 も号する也

斗り。志これあふりしとらあ志

志このあふりし 志この
 禁

分あなれた。秋の比聖海上人。

聖海上人
 かいりらひ
 獅子能犬

そかそ人あまこ所そひ
 ていさあへ出雲れうそひ。ひ

もらひめさせんそ。きりていさたらよ。ああり
 みてゆい信おこり。御前ある獅子こ
 ぬいぬきむきてうしろはなよたらうりなれ。
 上へいしく威してあまめて。あまの獅子れ

たちやうふとめつりしあうき故あゝんと涙を
ていふ教うす辨務の子に依候しとがめむや
吾下ありとらんどもあやうそて後よ地
とありきる。却のつふかさんきといふ人
於ゆりかりて。たあく物一むぬへきり
きりす赤衣とあひて。げはれれ獅子のたてられ
やう。定てあひありしうふ侍らんらとあは
やきりんれれば。そりりい。さうあきり

くとも乃はらとさる。奇怪り候りありやま
あゝあうすへあきりてらよきれえよん
の感涙いさうりありふたり

善の時は淫を信をまゝ家
基あり柳をまいてさう也
けこの本板重半れ義統
あり内経冊をまへて進上
乃とき冷泉家よ八重は
らへらうり又三条三光
院のお侍とて重半ふより
若田れ養ありあやうけ
半をもちひ進長の時経巻

やあいのまよすゆりもの
たてらんよこさぬ物あよ
ふへきおや。ま物あよん
きんおまをて。本れあをひ
あり。紙のりい。通てゆひ

らありとど人三の感す

當代

傍 春之傍也佐よつせまひ

てち子よそおん子り時乃

ことよふ

万里小沼敏 思のゆふる人

一春之のび時おそこ

ところ也

堀川大納言 昨依公也後能

嗣春之乃時れ大夫也花山

の庶流堀川三号也

愚紫之齋菜也 論評陽貨篇

むろきあひてた今夜雨ふてむじくさびたふ

一當代のまの堀よたりに

比万里小沼敏内雨か

早小堀川大納言敏程

張志終一堀のうしん

ありて系るとたり

備後乃言又六れまをさうり

あきうそふしとをあくむとひふ文と沙後勢

りせご記すあるは中と依後とれとも

続一出されぬあり程よくむさかんと作

しとめて求ふあると依らうお丸の巻れそこ

くのりとお海りとするうはあかう

獲一とそむさくまのせたまひさうふの

しとる。現ともと常たうあましとむり此人

そいさくうのりとも。いしとく積一たる

一。此の卯小夕とをくらねん。登、百里不き
 一。物といふ白あり。陽唐れ韻と見ゆふり。
 百里あやまりうとヤうらうとよくそんせ
 ちまもをる。よみせうるふありとそ。管者の
 ことくひひやるとらう母。あやまり侍まの
 数行 行の字庚韻よも陽韻
 みものきり庚韻あまを行
 歩の義也陽韻よてハ行列
 乃き也敬韻ひくハ行跡徳
 行の義にあまを投歩を
 投歩れ義よとハ庚韻あ

不へ一陽韻あまのむかつら
 ありとソふせ

三塔 山門乃東塔西塔横川
 あり

常妙堂
 龍華院

佐理 正三位前太宰大貳參
 議佐理卿小野宮孫一條院
 長徳四年七月晦薨五十五
 歳公卿補任

行成 正二位大宰權師權大
 納言行成卿四載院御宇天
 祿三年誕生後一條院五壽
 三年二月薨五十六補任

うあ

人あまこなあひて三塔はうがえん
 札乃り侍りよ。横川れ常妙まうがえん
 堂れうら龍華院とくき院
 胸のき額あり。依理仍成の
 あひたうこうひあつまこくひ
 まこ皮せひと中侍りや。
 貴僧しくくい中侍り

位署 姓名の上は官位と云
連系と位署と云ふ

と。仍女をくへ。い。う。き。ま。入
一。依。程。な。う。ん。裏。あ。ま。へ。の
ら。ひ。と。い。ひ。た。は。し。よ。う。う。の。ま。を
つ。ま。り。出。乃。巢。ま。て。い。せ。け
あ。つ。と。あ。く。え。記。の。こ。ひ。て。あ
尺。婦。一。よ。仍。女。位。署。の。字。并
号。さ。こ。う。ふ。尺。婦。一。う。ん。人
と。此。真。こ。い。入

那崇隆寺 道眼 一か上よ

乃えこり

八災 憂歡苦樂尋伺出息

と八災と云は衆法扱ふあ

て

而化 師をん能化と云弟子

とて而化と云あり

みかた

那崇隆寺の。乃。眼。を。

だんぎ

了。後。義。せ。い。ふ。八。災。と。云

し。と。忘。述。て。誰。う。お。り。と。云

とよけ

と。い。ひ。し。と。而。化。と。云。お。り。と

え。さ。う。も。う。つ。り。と。云。れ。く。う。や。せ

い。ひ。か。し。と。云。れ。へ。と。云。く。感。し。ゆ。り。き

けん

賢助僧正よなまひて加持

くらぎ

清水と云人侍。陣のあま

賢助僧正 醍醐三宅院也月

野家の人也

加持香水 二月八日あり

又日の相ま。た。法。あり

をば目...
加持あり、加行所の三尊
あり持とん行老の三葉也
彼三尊を付業も持とん紙
加持とよみ

えりああまふとひて。やうくくくく出
くくくく。あふひひ。それともあてからせよ
いふれに。くくくく。やうくくくくくね

千代の寺 釈迦堂也 二月十
五日ハ遺教経の法あり

二月十日。月ありき。あう
ち文く。のち乃てくくく

てうくくくくあふまへて。ひもくくくかあくか
く。神受志傳。傳あり。女けあ。まゆひんよ
里くかろくく。か入てむきふわくれん。あひ
あもくくくく。えうりあきハ。けんあくとあひく。
まりのまいたろく。ねゆよりておあ。あふ
積くくくね。まはあつ。あふのありき。女をれ。
そくろくくく。いふれ。ついでよ。あふ。あふ
ふくく。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。

一、情おしと恨おし人あんなの路ひ出し
 ころふ。さうみこ心はゆるぬとすてやふ。
 けり後よきく作ら。彼強き乃我。此つりぬれ
 ぬより。人の心強くちりて。さうぬ世をさつて
 あり。さうさう強て。せんあへいさんあさつて
 せらる。のち。さありさ海系りて。せ奥あん
 とて。ころり強きろと我と

箕宿 東に七星角九氏房心

八月十八日九月十三日

尾箕北方七星斗牛女鹿危
 室壁西方七星奎艮胃昂畢
 此南參南方七星井鬼柳星張翼軫
 星つ毎日よあてく。さ日の宿と守近代さうさうよりさる。暦よ八宿
 と次第して目扱又配と日かろ。吉備公の相傳ありとそ別よあ後さうハ
 ぶさる。中比大内四録すり日牛宿ありとて牛を除て廿七宿とせり。今
 かんくへん。八月十五九月十三婁宿よあて。さ初とよ兼ぬ。牛宿を除き
 ころ。さを用ひころあへ。八月一角二九三氏四房五心六尾七箕八斗九
 女十廬十一危十二室十三壁十四奎十五婁也。九月一氏二房三心四尾五箕
 六斗七女八廬九危十室十一廬十二奎十三婁也。婁宿清明未嘗之

婁宿也。比宿清明なる

故。月とさへ。あさふ。は良典と云

信走浦 奥列は信走郡あり

列のふ乃浦れあふのえふ

彩古今よ

めもさせく。つらぬて山あふ

は發端のくしくふのふや
りよりきくあり
あぢく 不挾 浮世類聚
あり

くくぬの山 山城の名を
暗波山と云あり
古今よ

むめれを白の妻へまぐぬ山
やまよこゆきとちろくそまきり

古拙よ暗布山とかきり
貫之りちよ

秋きり乃らちぬる時ハくぬ山
影つらあそそえりこりきり
響る山ハ別よ立ろり

くくかろ 兄弟也
りけあき 不都合義之

あつりーき 豊饒 富貴
也

あつり人 田舎人あり
ささあありあは

古今 小町りち
俺ぬのハカとさきそ乃ねは

あそふああふのまんとうあ
ふり人 媒也 遊仙窟ハ桂

心こりきり 媒約人を双す
ふきやまよりりち

て婚姻とますこ
あのかさよ 幸世しりきり

こいよハあちきあまよ
あり

は波山ハあまきり
あり

りり人志きりんよらりか
く通りん心のまらう。波り
は長とおりのゆくのさり
たきしんもおかりめ。あや
そくかろゆりしてむいあ
よむりあへん。いんま
ゆりぬへ。あまありい
ふぬのよびまにを法師の

やれあつり人ありあ
よさくしきよきん。さ
ぬああふのさく。中人
いついもはくきんあ
ひあてあれあぬ人
よむりあまきんあ
まよ。あまきりあまの
あまよ。あまきりあまの

あつゝかき 惜乃言とあつ

らむとよめり

あつむくろりきき

修勢地候よいくまよめと

一の正月は拂のむきり

よろよとひてつこてた

ちてえつとんとあつ

みくきり系

三カカシ

大和の

の皇居

乃西昔

そつれ此世中松子代とん介

の物とやハる金葉集

ま

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

あつむくろりきき

鉄道巻四

五三

望月のまきくあつとま

易豊卦云月盈則食穀名曰

月滿也滿則缺也望月滿之

名也日月近樹望者也

望月のまきくあつとま

望月のまきくあつとま

ねんごしぬ人ハ一乗乃中又所んるの系所よ
とんえぬよあかん。病のかりくも住するひ
あくして。死がきては。一。まじとのひまご
病急あらず。死はおもむりきり印と急。常住
平生此念よあひひて。生るがよあかくれり。踐
あて候。あつるよるを候せんとかひあやなり。
病よきして死門よ望む時。所般一事もあせ
ひ。ふくひあきて。年月乃シガ機急を悔て。げんひ

と一。あらふよつて。命をよくせ。あ
おひつうきして。あの子。彼子。た。い。い。い。い。
あてんとぬひよ。た。ら。ん。と。や。う。て
かりのぬきは。我。り。あ。い。は。り。み。さ。一。一。
ん。な。げ。ん。の。こ。う。わ。く。ん。あ。の。と。ま。あ。
人。こ。う。き。か。は。る。く。へ。一。一。あ。ん。と。あ。一。て。候。
勝。あ。ら。ま。て。な。よ。む。く。ん。と。せ。は。あ。般。つ。く。く。う。ひ。

如幻の生 金剛經云如夢如影

泡影

如幻の生

如幻乃生

鉄壁卷四

妄想 無業結法 曰莫妄想と
ありて曼中間香は降せる

放下 掉落は放下著と云ふ
ありて曼中間香は降せる

とりあふらん。すへては心然ら

妄想あり。不執心なりと云ふ
らば。妄心迷亂すと云ふ

て。一もをもあひへり。垂り万事成
致下して。心りむりふ時。さりりまくと云ふ
あくく。心身ありくと云ふあり

とろく 長の字也 也

司こへり。さへり。遠頃より

遠頃 逆頃也 佛眼遠禪師

りりあり。事き。ひとへ小若

云若舞 逆頃道在 中静
寒温自押 有海

業のためあり。業中いふ

二日 飲食男女之天 故存 尊
礼記曰

はこれ。あひむり事也。これ

とてしつ。しやむ時あり。業致するところ

ふはふあり。ふり二転あり。新作と云ふ

とめがまきあり。二ふはく欲。三ふは味あり

ふろの乃ぬ。いひ三ふを忘るは是顛倒なり

とてたつて。そこをくれ。ありありあり

ゆきふんりきとる

佛說三身壽量無遺經曰七殊
白佛言我等從昔聞如來說法
如來何佛聞此說法佛告文殊
言過四十一重內太院兼大毘
盧遮那說法文殊重白佛言四
十一重內太院何者是耶世尊
復言過十主十行十廻向十地
等覺內太院兼妙覺地大毘盧
遮那說法文殊重白佛言此
地毘盧遮那何佛兼說法世
尊復言妙覺地毘盧遮那兼無
始無終一心一念本佛說法文
殊重白佛言無始無終一心一
念本佛兼何佛說法世尊復言
無始無終一心一念本佛兼無
心無念本佛說法文殊重白佛

八むある事一平。又、その
く仏をいふあり物より仏ら
まといふ。ちうう云仏子を人
乃ぬ。り也と又、何人ハ何
とて佛よぬぬやらんと。
又、たけしへよりのえさ
ありことこふ。又、何と
いひらる仏とを何とぞ

言無心無念本佛兼何佛說法
世尊復言無心無念本佛上更
無佛陀無前佛無後佛無心無
念本佛以不思議為無本去
來無三身性無十界性云今
盡不記

ハ、何とぞと。又、こふも
又、たけの仏れへいひ
てぬぬありと。又、よる

いへんめゆ守りゆ一乃仏をいふお系仏
りり流をぬゆの時。えおるよりやありけ
てよありや。いよのきんとりいこくまらふとひ
つめつ積てえさへいあり信つと。信ん
くくつて、真一き

世間流布之本籍紙數多
為之入正又字樣與重合
於新刊者如

慶各賦年春春吉辰

重刊時
本館主事趙維翰一見此
念本館不致有誤
辨別之無誤也
世間流布之本籍紙
言其心與本館無異



海
知

